

第3回コーヒー勉強会 報告書

講座名: 第三回コーヒー勉強会

開催日時: 2009年11月21日(土)10:00-13:00

開催場所: JICA 地球ひろば 2階 セミナールーム202

参加者数: 34名



アフリカ理解プロジェクト

『コーヒーの残留農薬問題を考える』

エチオピア産コーヒーから食品衛生法の基準を超える農薬の検出が続き、実質輸入がストップした状態が続いています。今回の勉強会では、この問題について考えます。はたしてエチオピアのコーヒーは危険なのでしょうか？私たちは被害者なのでしょうか？

講師：石脇 智広（いしわき ともひろ）

石光商事（株）研究開発室 室長

(<http://www.qualityofcoffee.com>)

全日本コーヒー検定委員会コーヒー鑑定士講師

日本サステイナブルコーヒー協会理事

JETRO 専門家

（以下、文責はアフリカ理解プロジェクト）



● 講演概要

一杯のコーヒーの価値

魅力あるコーヒーの持続的な生産、流通、消費が実現するには、一杯のコーヒーの価値を売る側も、買う側も正しく理解することが必要。

幸せのコーヒーサイクル

コーヒーは、生産者、仲買人、輸出業者、輸入業者、焙煎業者、消費者の間を、おいしさ、満足感、そして対価の支払いと感謝で結ばれる幸せのコーヒーサイクルがある。ところが、エチオピア産の輸入生豆から食品衛生法の基準を超える農薬が検出され、これをマスメディアが報道し、政治家の発言などもあり、消費者の間には、生産はと生産国に対する怒り、不信、あるいは同情が生まれた。

食の安全と安心

今、日本では『食の安全・安心』への関心が高まっているが(A)、安全性を心配している対象について正しく知っているとはいえない(B)。

【A】食の安全に対する国民意識の現状

-不安を感じている:	31.8%
-やや不安を感じている:	56.3%
-あまり不安を感じていない:	10.7%
-不安を感じていない:	1.2%

【B】農薬に関する誤解 1

ガンの原因と思うもの	一般主婦の考え	癌専門家の考え
食品添加物	43.5%	1%
農薬	24%	0%
タバコ	11.5%	30%
大気汚染・公害	9%	2%
普通のおも	0%	35%

主婦が考えるガンの原因上位は誤解

専門家の中で原因とされている「普通の食べ物」については、あらゆる食べ物にリスクが含まれていることが認識されていない

『食の安全』は技術の問題。『食の安心』は心の問題。知ろうとしないで安心を求めれば、どんなレベルの安全が確保されても安心は満たされない。消費者が正しく理解しないと、無知による生産国への非難が増加し、結果的に消費者にも生産者にも大きなダメージを与えることを念頭に、まずは『知ろう』というのが今回の講演のサブテーマ。

なぜ農薬を使うのか？

農薬は、作業性、収量、安定性、市場性をあげるために使われる。農産物の中には、桃のように農薬を使わなければまったく収量が期待できないものもある。農薬使用のメリット(収穫高の確保、害虫駆除による病気予防)とデメリット(残留農薬が及ぼす人体への影響、環境や生物への影響等)を正しく理解することが重要。

世界の三大感染症のひとつであるマラリアには DDT が有効である。スリランカでは、1948 年から 1962 年までの間、DDT の定期散布によりマラリア

患者が 250 万人から 31 人に減った。しかし、1960 年代にレイチェル・カーソンの「沈黙の春」が出版されて農薬への批判が高まり DDT の使用が禁止されたために、その後の 5 年間でマラリアの患者数が 250 万人に逆戻りした。農薬は正しく利用することが重要で、人が残留農薬が原因で死に至る確率の順位は、タバコ、アルコール、自動車事故などよりもはるかに低い。



食品衛生法で安全性評価は出来るのか？

例えばアセタミプリドという農薬の、コーヒー生豆に適用される基準値は 0.01ppm、国内産緑茶は 50ppm。この場合、基準値を超えたコーヒー生豆は危険なのでしょうか？

2006年5月29日に「PL(ポジティブリスト)制度」に移行し、残留基準が設定されていない食品には一律基準(0.01ppm)が適用されるようになった。

エチオピアからの輸入コーヒー生豆はこの一律基準を超え、問題となった。しかし、厚生労働省は、問題となったコーヒー生豆について以下のような説明を公表して、健康には害がないとしている。つまり、安全性には問題ないが輸入してはいけないということです。

「 γ -BHC は、コーヒー豆には 0.002ppm の基準値が適用されますが、例えば米には 0.3ppm、はくさいには 1ppm、ピーマンには 2ppm の基準値が設定されています。 γ -BHC の許容一日摂取量(人が一生涯毎日摂取し続けても、健康への影響がないとされる一日当たりの摂取量。以下同じ。)は、体重 1kg 当たり 0.005mg/日であることから、体重 60kg の人が当該違反のコーヒー豆(生豆として、以下同じ。)を毎日約 1.3kg 摂取し続けたとしても、許容一日摂取量を超えることはなく、健康に及ぼす影響はありません。」²

EU では、農薬による人体への実害を評価に含めた基準の運用がなされており、日本のエチオピア産コーヒー輸入に見られる、実際には健康に害のない輸入食品が流通禁止にまで発展するケースはほとんどない。輸入コーヒーは、農薬基準がすでに存在していた日本茶よりもはるかに厳しい基準を用いられている。

農薬の安全性を評価してみる

ADI(Acceptable Daily Intake: 摂取一日許容量)³は mg(残留農薬)/kg(体重)/日で示される。コーヒー生豆のリスク評価の公式は次のようになる(注 この式はコーヒーにしか使えません)。

$$\text{対 ADI 比(\%)} = \text{検出濃度} / \text{ADI}$$

この式から、エチオピア産コーヒー生豆の対 ADI 比は以下のとおりとなる。

農薬名	検出濃度 (ppm)	ADI (mg/kg/day)	対 ADI 比 (%)
リンデン	0.23	0.005	0.9
クロルデン	0.03	0.0005	1.2
ヘプタクロル	0.14	0.0001	28

このような厳しい日本の法規は、一方的に厚生労働省が決定したのではなく、日本人消費者が求めた一面がある。世界有数のコーヒー消費国、日本がこのような現状でよいのか、改めて考える必要があるだろう。

¹ 基準が設定されていない農薬等が一定量以上含まれる食品の流通を原則禁止する制度

² 厚生労働省ホームページ <http://www.mhlw.go.jp/houdou/2008/05/h0509-6.html>

³ 日本では、内閣府の食品安全委員会が ADI を設定。

私たちに出来ること

報道されること、説明されることを鵜呑みにするのではなく、食品の安全性について学ぶ態度を持ち、正しい知識に基づいた安心を得ることで、幸せのコーヒーサークルをもう一度。農薬の安全性について学ぶには、次の本がお薦め。

- ・松本和紀、「踊る『食の安全』家の光協会
- ・群馬県、「ちょっと気になる農薬のはなし」



質疑応答

【Q1】エチオピア産コーヒーの現時点での見通しは？

【A1】昨年の残留農薬の最大の原因は生豆を入れる麻袋だった。全て焼却し、新しいものへ置き換えたので、昨年より状況は改善されている。最大のリスクは、小規模農家から買い集めたコーヒー豆を均一にミックスする技術をエチオピアが持っていないこと。このため、サンプリング検査をしても結果のばらつきが大きく、違反のリスクを小さくすることが出来ていない。

【Q2】残留農薬の基準改正について、日本の厚生労働省やコーヒー関連団体は、これを変えようという動きはあるのか？また、東アフリカの人びとからの反応は？

【A2】農薬の基準変更の機会はある。現状を考えると、日本側の法改正が最も現実的な手段。現在、たまたまエチオピアが農薬問題でフォーカスされているが、農薬管理のレベルが進んだ中南米のコーヒー生産国と比較し、アフリカ各国は、どこも同様のリスクを抱えている。日本の三大ブレンドコーヒー『キリマンブレンド』『ブルマンブレンド』『モカブレンド』の内、ふたつがアフリカ原産のコーヒーであることを考えると、輸出国側に対応を求めただけでは問題の解決にいたらない。

この2月に日本の残留農薬問題についてルワンダで学会発表した際には、生産団体から袋叩きがあった。東アフリカ側の主な主張は、「焙煎して飲むコーヒー豆を何故、生豆のまま検査するのか？」というもの。国際的には日本の基準が理解できる者はいない(後日、今後一切トヨタ車は買わないなど日本製品不買を主張するコメントがあったことを知った)。但し、最後に議長(南ア人)は、長期的に考えねばならない問題だが、今後も継続して取引を望むならば、輸出先の国々に合わせた品質を確保することも必要だという発言もあった。

【Q3】エチオピアの生産方法の主体はどんなものか？小規模農家とプランテーションの比率は？小農では、農薬を買うほどの体力がないのでは？また、なぜエチオピアだけがフォーカスされているのか？他国でも状況は同じではないのか？

【A3】エチオピアはコーヒー発祥地のひとつ。他国との違いは、野生のコーヒーが多いということ。プランテーションは一割程度で非常に小規模の零細農家が多い。過去2回調査に行ったが、コーヒー農家のオーガニック志向は強く、農薬を使っている形跡はない。また、使う余裕もない。ただ、農薬の管理が甘く、また、土壌や水源が汚染されていることもあるため、使っていないはずの農薬が検出されるということが起こりえる。

また、現在エチオピアで起こっている問題は、決してエチオピアだけの問題ではない。他にも予備軍はたくさんある。組織的に対応しなくては解決できない大きな課題だ。

【Q4】日本以外で、エチオピアからコーヒー豆を輸入している国の基準値は？

【A4】あまり詳しくないが、ヨーロッパは 0.01ppm を適用。但し、欧州は、基準をクリアできなかった場合にも、安全評価をするという仕組みがあり、これまで輸入がストップになったことはない。焙煎すると濃度が薄まることもわかっているリスクの少ない品目であることから検査もあまりされていないのが実態。



【Q5】COE(Cup of Excellence)のコーヒーを時々購入するが、農薬の話を聞かないがなぜか？

【A5】COE(Cup of Excellence)とは、オークション上位入賞コーヒーを輸入業者が高く買い付けるといふもの。ほとんどがリスクの低い中南米さんのコーヒーであることが要因。アフリカはルワンダのみ(昨年から)。

他のコーヒー豆と検査基準が変わるわけではない。一般に日本の基準は輸入作物に厳しい。国内農産物にもリスクがあり、国産だから安心というのは間違い。

【Q6】日本の消費者団体は、エチオピアコーヒー豆の農薬汚染に注目しているのか？

また、日本のコーヒー団体の動きは？

【A6】必ずしもすべての団体がデータを性格に分析、評価しているわけではないが、消費者の声には真摯に耳を傾ける必要がある。業界団体としてではなく、当社としてのスタンスになるが、安全・安心への取り組みを年々強化している。自社のラボを充実させ、残留農薬については原則全量検査。また、リスクの高いカビ毒についても検査できる体制を築いている。



- 【Q7】現在の日本では生産者の顔が見えることが、消費者に安心感を与えている。そういった距離感も問題解決のキーワードになるのでは？と思うが、その距離間を縮める努力はしているのか。
- 【A7】実際顔を合わせ、膝を突き合わせて話し合えば、不信感も和らぐ。業界では、焙煎業者までのサポートはしているが、消費者にまではまだ届いていないのが実態。
- 【Q8】エチオピアの輸出業者と生産農家では、生活のレベルに大きな差異があるようだ。内々格差の実態を知りたい。
- 【A8】実際に格差はある。エクスポーターの豊かさに驚く一方、農家の生活は極めてつましい。賛否両論あると思うが、時間をかけてできた格差を一瞬にして縮めるリスクも考慮するべきだ。ちなみに、映画『おいしいコーヒーの真実』でコーヒー農家の窮状を訴えていた出演者に現地で会った。現在、彼はものすごく裕福になっている。アジスアベバに大きな工場を作って切り盛りする姿に驚いた。簡単に答えは出せない。現実的には、ゆるやかに格差をなくす。ゆるやかに変化を起こす。一気に格差をなくしたら争いが起こるかもしれない。そうなったらコーヒー産業そのものが壊滅する。
- 【Q9】農薬の基準と、実際に人体に害を及ぼすかどうかの判断…という問題提起があったが、今後、わたしたちが農薬と付き合っていくにあたって注意しなくてはいけないポイントは？
- 【A9】まずは、生産国側の教育が必要。生産国では、農薬の使用方法を誤り健康被害が実際に起こっている。管理・知識のレベルを上げなくてはならない。消費国側は、まずは『知ること』。農薬を使わないと桃やリンゴは収穫できない。また、農薬問題を非難しながらも、まだまだ、実際の消費行動には矛盾がある。正しい知識を持って世論で国を動かすことができればベスト。過剰な消費者の要求が、いかに現地の生産者を苦しめているかを考えることが必要。過酷な労働環境を強めているのは消費国であることを忘れてはいけない。

以上

その他の参考文献

石脇智広、「コーヒー『コツ』の科学：コーヒーを正しく知るために」、柴田書店

勉強会参加者の声

- ・ 新しい視点でエチオピアを捉えることができた
- ・ 残留農薬に関する日本の基準値に関して正しく知ることの大切さを理解した。
- ・ 安全と安心について、自分の考えを持つ大切さを知った。
- ・ 農薬や添加物に過敏になるより鮮度の方が大切なのではないかと感じる。
- ・ 私たちがしなければならなかったことがわかった。

- ・ エチオピアのコーヒーの輸入が再開されるためには、現地の問題だけでなく、日本国内の問題を解決する必要性を感じた。
- ・ 農薬に関して無知であり、報道に踊らされていると感じた。
- ・ 物事をよく知ることで不安から開放されることがわかった。不合理な制度を変えるために、人々に考えてもらうことが重要だ。
- ・ 今日知ったことを周りに伝えていきたい。
- ・ 発表では、意図的に偏ったデータを取り上げ、業界より過ぎた内容ではなかったか。